令和６年１２月　番組審議会議事録

株式会社ぴ～ぷる

2024年１２月３日

作成：放送部　辻美由紀

令和６年１２月番組審議会　議事録

〇日　時　　令和６年１２月３日（火）１７：００～１８：３０
〇会　場　　唐津シーサイドホテル
〇出席者　　委員長　　栗原　宣康　　（唐津市 教育委員会　教育長）
　　委　員　　西　　亘　　（玄海町みんなの地域商社 統括ﾏﾈｼﾞｬｰ
　　兼 EC･外販･地域ﾌﾞﾗﾝﾃﾞｨﾝｸﾞﾏﾈｼﾞｬｰ）
　　松尾　由美　　（国際ソロプチミスト唐津 会長）
　　松田　毅　　（佐賀新聞　唐津支社長）
　　森　千晶　　（唐津市 政策部 広聴広報課 課長）
　　山口　ひろみ　（唐津市子育て支援情報センターセンター長）
　　山下　正美　　（唐津商工会議所　専務理事）
　　ぴ～ぷる　　中村　隆　　（代表取締役社長）
　　山下　善史郎　（取締役常務）
　　亀井　信一　　（取締役放送部長）
　　松尾　卓　　（放送部 副部長）
　　辻　　美由紀　（放送部）
　　吉原　浩平　　（放送部　副主任）
〇欠　席　委　員　　木村　剛（唐津青年会議所 青少年交流委員会 委員長
　　／㈱渚館きむら 代表取締役）

※敬称略。委員は 50 音順

■．株式会社ぴ～ぷる　社長　中村　隆　挨拶

一年間、皆さまには番組をご審議いただきありがとうございました。一年間を通していろいろな意見をいただきながら、変わっていかなければいけない、取り入れていかなければいけないことが多々あると思う。審議委員会で意見をいただいたことを受け止めて、一歩でも二歩でも来年は進んでいきたいと思います。

■.番組審議委員長　栗原　宣康 委員長　挨拶

今日は第２回目の 12 月の番組審議会に集まっていただき大変ありがとうございます。
前回の審議会でお話をさせていただいた、七山の阿部先生の番組がまた受賞とのこと。
たまたま青少年の意見発表会が 11 月の初旬にあり、そこで阿部先生のお嬢さんが発表されていて、阿部先生もいらっしゃっていた。終わってお声がけしたら、「ちょうど今連絡があって」とお話をいただいて、とても嬉しい気持ちになりました。今日も皆さんそれぞれにご意見を聞かせていただけたらと思います。

■.受賞報告　株式会社ぴ～ぷる　放送部長　亀井　信一

放送部・田中直也が作った『故郷とともに生き、故郷とともに逝く　～孤軍奮闘する　若き医師の挑戦～』が日本ケーブルテレビ大賞の優秀賞、また「地方の時代」映像祭という、ケーブルテレビだけじゃなく、NHK や民放、学生などいろんな分野からの応募があるコンクールのケーブル部門で優秀賞をいただいた。間口の広い賞だったせいか、いろんなメディアからの取材の引き合いをいただいている。

また、受賞を記念し、先日シアターエンヤで、上映会と、阿部医師を招いてのティーチインを開催し、40 名ほど参加をいただき、熱い質問が飛び交ったりして有意義なイベントになった。いま全国のケーブルテレビでも視聴できる形で流通しているが、普遍的なテーマでもあるので、たくさんの人に見ていただければと思っている。

前回審議をいただいて、ご好評をいただいていた番組がこういう形で賞をいただいて、に感無量。ありがとうございました。

■．番組審議

審議主対象番組

●①『グラン・ブルー　唐津の海中世界』

【初回放送】2024 年 8 月 23 日【番組時間】約 16 分　【制作】田中 直也

唐津マリンスポーツクラブ（湊町）に協力いただき、四季折々に変化する唐津の海の風景や環境の変化などを紹介するコーナー。今回は体験ダイビングの様子を放送しました。

●『グラン・ブルー　唐津の海中世界』の意見（要約）

西　委員：僕も玄海町の仮屋という海の目の前に住んでいる者だが、魚を釣ったり、自分たちが食べる分や、サザエやアワビを捕ったり小さい頃はよくしていたが、最近海に潜ることが減ってきたので、改めて地元に住む魚の態系や、（海の中が）今こういう状態になっていると知るきっかけになるいい番組になった。また、マリンスポーツが、こういう価格帯で、こんなにハードルが低く参加できるというところまで知るいいきっかけになった。

松尾委員：初心者の体験リポートだったので、とってもわかりやすくてよいと思ったが、場所がどこの海なのかというのを知りたくなった。できれば地図などを出して、この辺りだという解説があったらよかった。海のごみを取り上げていたのもよかった。

山下委員：グラン・ブルーというタイトルは唐津の海の綺麗さや映画『グラン・ブルー』を想像したが、スキューバーダイビングのトレーニングと海の中の姿を見せるのと、どちらに重点があったのかという感じがした。私も場所はどこかというのが気になった。勉強になったのは、カサゴが英語でロックフィッシュだということ。

森　委員：リポーターの方の体験を通してスキューバーダイビングのやり方を詳しく説明されており、やったことがなかったのでイメージしやすかった。

実際の海中の映像を見て、唐津の海がこんなに綺麗とは正直思わなかった。いろんな色の魚がいたりサンゴもあったりして、そういう海中の様子が見られて良かった。海中遺跡なども個人的には興味があるのでそういうのも見られるとよい。

海中のごみが紹介されていたが、唐津もいまブルーカーボンの取り組みを市も始めているが、もう少しごみのことをクローズアップしてもらいたかったし、アマモの紹介もあったが、それがどういうふうに必要かというところも取り上げてほしい。テロップで重機の機という文字が「機」と「器」の２つ使われている

のが気になった。

松田委員：佐賀新聞でも今年の４月から月１回連載を波口さん（唐津マリンスポーツクラブ）にお願いしているが、写真が中心の企画なので、場所と、海の状況がどうなっているのかと、水深も入れてもらっている。ビジュアルで綺麗な海というところから入るが、春から月１回始めて、春夏秋冬、季節の移り変わりとともに、全体の２割ぐらい、現在抱えている問題点にも触れてもらうようにしている。（唐津の海を）大切にしていかないといけない、変わりつつもそれを活かし、残していかないといけないと考えてもらうきっかけになればと企画を始めた。言いたかったのは、当事者の方にしっかり出てもらって喋ってもらいたい。僕らが書くものとはまた違う観点や切り口もまた面白い。

山口委員：『グラン･ブルー』に関しては、唐津の子どもたちは海が近くで育っているのにあまり海に行かない。海を好まない。特に年齢が高くなれば高くなるほど海に行きたがらない。このコーナーを見たときに、そういう子どもたちに唐津の海は素晴らしいと知ってもらうきっかけの一つになればいいなととても感じた。

以前から波口さんには、地球温暖化でいま海中の温度がすごく高くなってきていて、海の中がこの 10 年ぐらいで変わってきたってと聞いていたので、問題提起というところでは、子どもたちも考えていかなければいけない。まさか唐津の海で、冬場も熱帯から来る魚が死ななくて海藻を食べていると聞いて、どんどん唐津の海が変わってきていることは聞いていたので、そういった問題提起をしてもらえるとありがたい。

栗原委員長：僕は湊の海かなと思っていたが、最初に驚いたのは松本さん（リポーター）が上手。私は若い頃かなりシュノーケリングが好きで、波戸岬などあちこち潜っていた。撮影にとてもいい日を選ばれたと思った。たぶん無風の日か南風の日だったのでしょう。水深が 4mか 5mぐらいのところか、砂地だが磯場のところを映されたが海藻がなく、磯焼けが起こっている。また、ウニの棘皮が長いガンガゼが出てきたが、あれはずっと南方系にしかいなくて 25 年ぐらい前から呼子やこの辺の防波堤からも見えるところに出てきた。この後だんだんそういう環境の変化も放送の中に出てくるのかなと思った。ただ、唐津の海は透明度が意外とあって綺麗、潜ったらいい世界があるというのは伝えてもらったと思う。

②『KARATSU　CULTURE　井本菜津子さん』

【初回放送】2024 年９月 13 日【番組時間】約 11 分　【制作】吉原 浩平

唐津の文化・芸術活動を紹介するコーナー。今回は、唐津出身のアーティスト 井本菜津子さんの作品づくりに取り組む様子と思いを紹介しました。

●『KARATSU　CULTURE　井本菜津子さん』の意見（要約）

山下委員：井本菜津子さんをまったく知らなかった。紹介してもらってよかった。というのも商工会議所は、３か月に一度、まちの話題みたいなものを出すので、そのネタ探しに非常に役立った。もう 1 つ、印象的だったのは井本さんが東京で少し壁にぶつかって、こっちに帰ってきて七山の緑でインスピレーションを感じた。見る景色によって心境に変化を及ぼし、その心境の変化が作品にも反映されているということ。東京にいたらあのような作品にはならなかったんだろうという感じがして、なるほどなと思った。ギャラリーを経営する本田さんも、あの場所で、しかもギャラリーというよりはアーティスト・イン・レジデンスという短期滞在しながら、そこで作品の制作をするためあのような作品が生み出されてくるというのが非常によかった。

松田委員：11 分という短い尺のなかで、地域が人を変えたり育んだりしていく様子が、分かりやすくよくまとまっていた。

松尾委員：とてもよい番組だと思ったが、番組を作成するのにどのくらい費やされたか？ 何か月かかかられたのでは？

吉原　：取材は２日、２回です。

松尾委員：すごい。３人の方もすごい自然体で答えているので、緊張させないでうまく話を聞き出しているなと思いました。感心しました。

森　委員：A3 ギャラリー名前は知っていたが行ったこともなかったし、イメージも湧かなかったので、それをテレビを通して見ることができて知ることができて良かった。井本菜津子さんは唐津の出身の作家だったが、私も知らなかったので、そういう方がいることも、この番組を通して知ることができた。

井本さんは、唐津の自然に色々と影響を受けて、創作活動においても自分の転機になった。もちろん栄太郎さんたちと出会われたことがあったと思うが。ずっと見ながら、私たちが何気なく過ごしている唐津の自然環境が、作家に影響を与えることを知り、この番組を通して自分のまちが誇らしく好きになった。

先月まで近代図書館でも、画室のアンソロジーという佐賀で活動する作家の企画があっていた。個人的な感想だが、唐津はスポーツで盛り上がっている感じも結構あると思うが、これからはもっと文化活動でまちづくりをしていけたらい

いのではと思った。

栗原委員長：私はこれを見た時に、本田さんと栄太郎さんは長崎のご出身で、唐津のあの場所が好きで来られて、唐津出身の井本さんが関東から帰ってきて、ここで改めて、この風景の中で自分を見出していると。作品と私が一緒になった気がしましたという表現をされていたが、まさに自分を取り戻されたような空間を唐津で感じてもらっている。別の形で唐津の魅力を発信してもらったプログラムだったと思い、とてもよかった。

③『若者に YELL　青木優弥選手』

【初回放送】2024 年 10 月 11 日【番組時間】約 10 分　【制作】丹野　俊

唐津でさまざまな活動で頑張っている若者を紹介し、応援するコーナー。今回は SAGA2024 全障スポの卓球選手として出場する青木優弥選手に大会への意気込みなどを聞きました。

●『若者に YELL　青木優弥選手』の意見（要約）

森　委員：自分の知らない活動、頑張っている若者のことを知ることができて、まず率直によかったと思った。身近な人がその競技を頑張っていることを知ることで、競技自体にも興味を持つことができた。

この回ですごく印象的だったのが、コーチが「青木さんがもともと知的な障害があって、かつ足の方もちょっとあんまり良くないので、コーチが不得意を得意でカバーする」というような趣旨のことを言われていた。私はまだ子育て中で、子どもを育てる中で、どうしても悪いところを直したくなるが、短所を指摘するのも必要かもしれないが、そこに時間をかけるよりも、いいところを伸ばして、それをその子の強みにするというコーチのその言葉を聞いたときに、自分のことと重なったからだと思うが、すごく胸がじんと熱くなった。

また、このコーナーで唐津で頑張っている若者を取り上げてもらうことで、私たちもなかなか知る機会がないことを知ることができるので、今後も引き続き、スポーツに限らず、先ほど芸術文化もあったが、いろんな頑張っている若者をこれからも取り上げ続けていただけたらと思う。

山口委員：全障スポの選手を取り上げてもらいとても嬉しかった。今回、国スポのほうが選手も含めてものすごくメインになって盛り上がっていて、全障スポになった途端、国スポとの温度差がすごく私の中では感じていたところもあり、このように全障スポの選手を取り上げてもらったことに関してすごく嬉しかったし、市民の方々に知ってもらうことができてとても嬉しかった。もしよければ、全障スポで唐津の方が金メダルを取っているので、どこかの機会で紹介していただけたらと思う。

栗原委員長：私も国スポではなく全障スポを取り上げてもらったのがよかったと思ったが、それにはもう一つ理由がある。東京オリンピック、東京パラのときは、東京パラの番組が何回もあり、いろんな競技の紹介があった。しかしパリパラの放送はものすごく短かった。東京パラのときの解説者の元バスケットボールの全日本のチャンピオンキャプテン根木さんが、いま、唐津に 4 年間パラリンピックサポートセンターから学校に毎年 4、5 回まわってもらっているが、根木さんが東京パラのときに全種目の中で、一案解説で長く出られた。その試合を見るたびにすごく感動する場面がいっぱいあった。パリパラも良かったが、全体に少なくなったことをすごく僕は気になっていた。そいう意味でもここで取り上げてもらってよかった。

もう一つ思ったのは、青木君が練習している風景が割と同じパターンの絵がすごく長かったので、もうちょっと違う練習場面があってもよかったのかなと思った。

審議副対象番組 ①②

●①『からとぴ KARATSU’n NEWS & TOPICS』

2024 年 11 月 13 日放送回　【番組時間】15 分　【制作】冨永・清水ほか

地域の話題や出来事をデイリーでお伝えしている『からとぴ』。この日は「金子財団 後期助成団体贈呈式」、「第 46 回 厳木町文化祭」の 2 本と、今年度から開始したコーナー「すくリポ・玉島小学校編」を放送。

離島を含む市内の全小学校を紹介することを目的に新コーナー「すくリポ」を設けた。今回が 2 校目の紹介。すくリポでは学校紹介や特色ある授業・活動などの児童リポート、校歌斉唱の様子などを紹介していきます。

●『からとぴ KARATSU’n NEWS & TOPICS』の意見（要約）

松尾委員：「すくりぽ」という企画は、どのようにして生まれたのかなと思った。学校に応募されたんですよね？

亀井　　：応募ではない。こちらから声をかけさせてもらった。

松尾委員：声をかけたら、その学校は答えられますか？

亀井　　：そこまでまだ始めて間がないので。

松尾委員：私も初めて見させてもらって、子どもたちがすごく楽しそうに積極的に参加されていて、あれは学校の先生と生徒が歴史や地元の勉強をされたのか、それともぴ～ぷるの方から、こことここはどうですかと提案があったのか、それを聞きたい。

亀井　　：担当者がいないので詳しいことはわからないが、ある程度こちらでご提案をさせてもらっていると思う。

辻　　：玉島小学校に関しては、学校側から、こういうことをしたいと提案があり、詳しく紹介している。

松尾委員：とても楽しい番組でいいなと思った。子どもたちが一人ひとり、個性のある発言の仕方で工夫されていて、物怖じしない。いまの子ってすごいなと。最後に司会の方がまとめて言われていたのもよかった。構成的にいいなと思った。

西　委員：僕も森さんと同じで、小学校低学年ぐらいの子どもがいる世代で、松尾さん言われた通り、すくリポ、すごくいいなっていうのが率直な感想としてあった。親としては、自分の子どもが出ることですごく嬉しいというのもあるし、子ども自身もその地域、玉島小学校の子たちが自分の地域のことをいろいろ話すことを放送したら、そういういいきっかけ作りにもなる。個人的には離島を含めた全校をすごく見てみたい。どんな学校があってどうなのかっていうのをすべて見たい。元気な校歌を聞くだけで、深夜に見たが寝られないぐらい元気をもらった。

少しズレるが、玄海町の青翔高校がいま、生徒を集めるのに苦労していて、地域未来留学といって去年から全国から募集を始めているところ。オンラインなどで、対象になる子たち向けに学校の PR をしているが、この番組とどこかリンクするものがあると少し思うところがあった。どういう媒体でどう発信すればよいかは課題ではあるかと思うが、うまくできるものがあるのではないかなと感じた。

松尾委員：これから先が楽しみ。

西　委員：うちの学校だとこんな感じでするんだろう、うちの子は喋れるかなとか思う。

松尾委員：これ、1 年間で全校？

亀井　　：その予定だったが、折衝で躓いたりしている。

栗原委員長：小中併設校を含めれば 42 校。

松田委員：前段が大変ですよね。

松尾委員：ぼちぼちでよくないですか。

中村　　：言わされ感、やらされ感が出るとやはりすぐ分かる。その辺が視聴者の捉え方と

して大きいと思う。

山口委員：中学校でやるのもいい。たとえば浜玉中学校区だったら、平原小と浜崎小と玉島小の子どもたちに浜玉中学校に集まってもらって、中学校ではこんなことをやっている、地域にこんな歴史があるというのを子どもたち同士が知ってもいいのかなと思った。こうやって玉島小が放送されているのであれば、平原と浜崎小学校の生徒に見てもらうとか。中学校になったときに一緒になるので、自分が住んでいる中学校にはこんな歴史があって、こんな文化があって、こういった小学校ではこんな取り組みして、こんな小学校だというのを知ってもらえる機会があったらいいのかなと思った。栗原教育長、お願いします。

栗原委員長：それぞれの学校には、こんな人がいたとか、こんな歴史的な価値があったというのがいっぱいある。それを子どもたちは割と知らないところもある。総合的な学習の時間が、小学校から中学校までずっと継続的にあるが、その時間で、ふるさと学習をやってみたり、夢づくりをやってみたり、いろんなことをやっているが、いま唐津市内の学校がここ４、５年何かイベントをやったら必ずプレスリリースを入れてくださいということをやっていて、『からとぴ』でもほぼ毎日学校が何か出ていると思うが、ものすごく取材に来てもらっている。それは何を狙っているかというと、さっき西さんが言ったように、親子での会話が生まれること、そして子どもと地域の人や親と地域の人の会話が「テレビ見たよ」というので生まれる。それに力を貸してくださった人と保護者さんとの会話が生まれたりと、いろんなことを狙っている。プレスリリースは毎日僕のところにたくさん来る。それはみんなプレスの方に流れている。それを見てもらい、テレビや新聞社が来てくれているので、それでいっぱい発信できたなっていうところは、いまお話いただいているところに繋がっている。山口委員が言われたことも、改めて私の心に留めて伝えていきたい。

森　委員：プレスリリースの話がさっき委員長からあったが、どうしても声かけはしてあるが、私たちもちょっと課題だと思うのが、プレスリリースが、ある学校に偏っているというのがある。ただ、私たち（唐津市広聴広報課）はプレスリリースを待って動いているので、いつも同じ学校が取り上げられたりしている。先生たちの忙しさもあるかもしれないが、傾向を見ていると、やはりどうしても小規模の学校がプレスリリースが多く、大規模な学校はなかなかない。どうしてもその映像で見る学校の様子というのが、小規模校の和気あいあいとして、それはそれですごく事実だし、いいところだが、唐津には大規模な学校もあって、大規模校の良さというのか、そういうのも映像で見るのはすごく訴えるものがあると思うので、『すくリポ』で大きい学校の子どもたちの良さというのも拾ってもらえるとありがたい。これはお願いになりますが。

中村　　：やはりその熱量の違いはあります。我々も一方的にお願いしますということだけではないので、それがマッチした時が一番いい番組になると思う。

●副対象②玄海町行政放送　　『親子食育いちご植え体験』

【初回放送】2024 年 10 月９日　【番組時間】６分 45 秒　【制作】

中西・吉原彩花【制作】中西・吉原彩花ほか

玄海町では、にぎわいのある地域作りのために町内外からの交流人口の増加につながるイベントに対して「地域イベント事業費補助金」を実施しています。
今回はその補助金を活用して玄海町内のいちご農園が主催したイベント「親子食育いちご植え体験」の苗植えの様子を取材、放送しました。

『親子食育いちご植え体験』の意見（要約）

森　委員：食育や、食の安全など、自分たちが食べているものが多くの人たちの努力によって作られて成り立っていることを消費者として知ることがきたという点、生産者と消費者が直接交流することができることを紹介されている点ではすごくいい番組だった。
特に今回、平川農園の方が出られて話されていたが、人手不足の課題解決を測るのにお手伝いをしてもらって、それと自社の PR とうまく組み合わせて、取り組みが展開されていて、すごくいいなと思った。同じような取り組みが、他の作物や他の農家で、農家に限らずだが広がっていくことで、後継者不足など少しでも人手不足の解消につながっていく取り組みのきっかけにこれはもしかしたらなるのではと思いながら番組を見た。主催者の声や参加された方の中の声を拾ってやるところもすごく良かった。

西　委員：イベント補助金を使われている事業者が多いが、そこをしっかり、この補助金を使ってこういうことをしましたというのを伝えるきっかけになる番組かなと思った。使っているという話は聞くが、じゃあどう使われたのかというのが広報誌のコーナーの数行とかで収まっているのが結構あるので、手を挙げられる人はいるが、まだまだたくさんいてもいいのではと思っていたので、その創出に繋がるいい番組になればなと率直に感じた。
僕自身が今回このイベントのスタッフの一人としてお手伝いさせていただき、かつ家族は参加者として参加したので、当日の様子を思い出せる和やかな雰囲気が出ているいい番組になっていた。同じようなものが他にも出てきたら、また唐津でも同じような補助金とか多分あったりすることも多いと思うので、そう

いうのがたくさん出ていたらよりいいと思った。

栗原委員長：地域イベント事業補助金、確かにそういった補助金の制度があったことが知られる非常にうまい機会ですね。

●副対象①②まとめての意見

■．その他の**番組審議**　主な特別番組・主なレギュラー番組

■．次回番組審議会について

亀井：次回番組審議会の開催日については
来年４月に開催される予定だが改めて案内する。

■．閉会